



Title	コーパスに見られる中国人日本語学習者のフィラーの習得
Author(s)	Chen, Zuohao
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100478">https://doi.org/10.18910/100478</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# コーパスに見られる中国人日本語学習者のフィラーの習得

CHEN ZUOHAO (言語文化学・M1)

## 1. はじめに

フィラーは、言いよどみ、遊び言葉、場つなぎ言葉などとも呼ばれ、発話と発話の間を埋める無意味な語であると考えられてきた。しかし、近年、その機能的な役割が明らかになり、音声コミュニケーションにおいて必要不可欠な要素であるとも言われている。また、日本語教育が盛んになっていく中で、フィラーも学習者のコミュニケーション能力の一つとして扱われ、評価されている。習熟度が高いほど、コミュニケーション能力が高くなると思われるが、フィラーの使用と習熟度との間でどのような関係性を持つかなどについてはまだ課題が残されており、さらなる深い考察が必要である。

## 2. 先行研究

フィラーの使用と日本語のプロフィシエンシーに関する分析として、山内(2009)と陳(2024)が挙げられる。

言語のプロフィシエンシーに関して、山内(2009)は、使用された語から日本語能力を推測できると述べている。フィラー「あの」は中級になると大量に出現し(山内, 2009: 11)、フィラー「その」は超級になると使用が多く増えることを学習者の発話データの観察を通して明らかにした(山内, 2009: 43)。また、フィラー「まあ」については、牧野成一氏の、OPI試験において、『まあ』という言葉がうまく使える被験者は『中級以上です』という言葉を学習者の発話データに基づき支持した(山内, 2009: 58)。

陳(2024)は「北京日本語学習者縦断コーパス」(以下、B-JAS)における異なる習熟度グループの学習者の七回目調査に基づき、フィラーの使用傾向を比較した。その結果、N1とN2グループの学習者は「あ」と「あの」を、N3グループの学習者は「あ」と「その」を使用する傾向があることが示された。

学習者のフィラーの習得に特化して分析した先行研究として、小西(2018)と石黒(2022)が挙げられる。

小西(2018)は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」において、12の異なる言語を母語とする学習者370名を対象に、フィラーの使用が習熟度やタスクによってどのように異なるかを分析した。インタビュータスク(以下、Iタスク)、ロールプレイタスク(以下、RPタスク)、ストーリーテリングタスクを用いた分析の結果、習熟度が高くなるにつれて母音型フィラーは減少し、語彙型フィラーは増加することが分かった。また、初級および中級レベルの学習者には対話タスクと独話タスクでフィラーを使い分ける傾向が見られなかつたが、上級になると、タスクによる違いが現れるものの、正確な運用には至っていないことが分かった。

石黒(2022)は中国語を母語とする日本語学習者がフィラーをどのように習得するかを、学習者の日本語フィラーと中国語フィラーに対する評価という側面から考察した。分析データには、「北京日本語学習者縦断コーパス」のIタスクの三名の学習者のデータが用いられた。分析結果によると、学習開始当初は中国語のフィラーが多く使用されているが、学習歴が長くなるにつれて中国語フィラーの使用が減少することが分かった。また、学習者は留学前までに「あのー」「えーと」、留学中に「なんか」「そのー」「まあ」という順でフィラーを習得していくことも明らかになった。

以上に述べたように、学習者のフィラー使用と日本語のプロフィシエンシーの関係性、ならびにフィラーの習得に焦点を当てた先行研究をまとめた。しかし、山内(2009)および小西(2018)の研究においては、学習者の発話データが同一話者集団から収集したものではなく、学習者のこれまでの学習歴を考慮されていない点が課題として挙げられる。例えば、山内(2009)によれば超級になると使用が増えるフィラー「その」が、陳(2024)の分析によるとN3グループの学習者にも使用されていることが示されている。

### 3. 研究課題

先行研究では、フィラーの使用が日本語の習熟度と深い関係があることが示唆された。本研究では、先行研究に踏まえ、学習者の習熟度が上がるにつれて使用が増えると思われるフィラー「アノ」「ソノ」「エート」「マー」を対象とし、その使用が学習歴及び習熟度との関係にどのように関連するかを明らかにすることを目的とする。さらに学習者の母語を統制するために、分析対象となる話者を中国語母語日本語学習者とする。

### 4. 調査方法

本研究の調査方法として、主に B-JAS における学習者のデータを使用し、学習歴と習熟度という二つの側面から分析を行う。B-JAS は、大学で日本語を専攻する学習者の発話や作文データを四年間にわたって収集されたコーパスである。本研究では、B-JAS の大学入学時に日本語学習歴がなかった 15 名の学習者を対象とし、I タスクおよび RP タスクにおいて収集された発話データを基に分析を行う。学習者は各学年において、日本語習熟度テスト SPOT<sup>1</sup>と J-CAT<sup>2</sup>が実施されている。タスクは年に二回、四年間で計八回実施されている。5.1 では全八回のデータをもとに分析を行うが、5.2 では習熟度テストが実施されている第一、三、五、七回目調査のデータのみを扱う。

### 5. 調査結果と分析

#### 5.1 学習歴から見るフィラーの習得

この部分では、学習歴に基づいて学習者のフィラーの使用を分析する。まず、フィラー「マー」について分析を行う。学習者の各回における「マー」の使用語数を一万語あたりの調整頻度にして、図 1 のヒートマップに示す。図 1 の 1 行は一名の学習者を表す(表 1 参照)。見やすさのために、行は学習者の ID ではなく、七回目時点の J-CAT の点数もとに高い順で並べている。つまり、上の行ほど、第七回目時点の習熟度が高いことである。横軸は各調査回、右側のカラーバーは「マー」の使用頻度を表す。

図 1 を見ると、「マー」の使用数が第六回目調査から第八回目調査にかけてピークを迎えることが多いことが分かる。また、第七回目時点で習熟度が比較的に低い学習者(第 11 行目から第 15 行目までは、これまでの調査回までは「マー」があまり使用されていないことが確認できる。

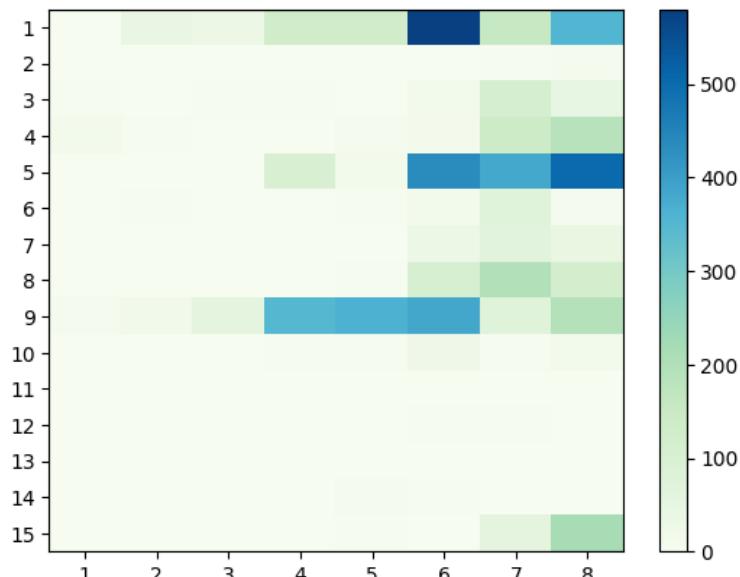


図 1 「マー」のヒートマップ

続いて、各グループの「マー」の使用と学習歴との関係性を明らかにするため、2 変数の相関関係が強いほど絶対値が大きくなる(山田ほか, 2008)相関係数を算出する。相関係数の値( $r$ )に関する評価は表 2 の通りである。

<sup>1</sup> 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点「TTBJ 筑波日本語テスト集」  
<https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/p1.html>(最終閲覧日:2025/02/21).

<sup>2</sup> 一般社団法人日本語教育支援協会「日本語テストシステム J-CAT」  
<https://j-cat.jalesa.org>(最終閲覧日:2025/02/21).

表2 相関係数の大きさの評価(山田ほか, 2008: 64)

相関係数	大きさの評価
$-0.2 \leq r \leq 0.2$ a	ほとんど相関なし
$-0.4 \leq r < -0.2$ $0.2 < r \leq 0.4$	弱い相関あり
$-0.7 \leq r < -0.4$ $0.4 < r \leq 0.7$	中程度の相関あり
$-1.0 \leq r < -0.7$ $0.7 < r \leq 1.0$	強い相関あり

学習者と学習歴とのスピアマンの相関係数を計算したところ、その相関係数が 0.52 であり、両者は中程度の相関があることが分かった。

上記のような手順で他の三つのフィラーと学習歴との関係性(相関係数)を計算したところ、以下の結果が得られた。

学習歴と「ソノ」の相関係数は 0.44 であり、両者は中程度の正の相関があることが分かった。

学習歴と「エート」の相関係数は 0.11 であり、両者はほとんど相関がないことが分かった。

学習歴と「アノ」の相関係数は 0.21 であり、両者は弱い正の相関があることが分かった。

## 5.2 フィラーの使用と習熟度との関係性

この部分では、4.で述べたように、第一、三、五、七回目調査のデータを利用し、学習者のフィラーの使用と習熟度との関係性を分析する。学習者の各回の J-CAT の点数を習熟度の尺度として扱う。15 名の学習者の計 60 回分の習熟度と四つのフィラーとの相関を計算したところ、以下のような結果が得られた。

「アノ」と習熟度との相関係数が 0.31 であり、両者は弱い正の相関があることが分かった。

「ソノ」と習熟度との相関係数が 0.42 であり、両者は中程度の正の相関があることが分かった。

「エート」と習熟度との相関係数が 0.1988 であり、両者はほとんど相関がないことが分かった。

「マー」と習熟度との相関係数が 0.62 であり、両者は中程度の正の相関があることが分かった。

さらに、フィラーの使用が習熟度とどのような対応関係を持つか確認するため、習熟度と相関があると確認されたフィラー「アノ」「ソノ」「マー」を説明変数として重回帰分析を実施した。重回帰分析の結果は表2の通りである。

表2 三つのフィラーを説明変数とした重回帰分析

	偏回帰係数	標準誤差	t 値	p 値
Intercept(切片)	170.92124	9.40976	18.164	< 2e-16
アノ	0.05471	0.02268	2.412	0.019172
ソノ	0.12344	0.04574	2.699	0.009181
マー	0.35448	0.08684	4.082	0.000143
決定係数 : 0.3406	F 値 : 9.642	自由度 : (3,56)	重回帰モデルの p 値 : 3.147e-05	

表2により、四つのフィラーと習熟度との関係性は以下の重回帰式によって説明できると考えられる。

$$\begin{aligned}\text{習熟度} = & 170.92124 + 0.05471 \times \text{「アノ」使用数} + 0.12344 \times \text{「その」使用数} \\ & + 0.35448 \times \text{「マー」の使用数}\end{aligned}$$

### 参考文献

- 石黒圭 (2022). 「日本語学習者のフィラーの習得と評価—中国語を母語とする日本語学習者3名を対象にしたケーススタディー」窪薙晴夫・朝日祥之(編)『言語コミュニケーションの多様性』123-143, くろしお出版.
- 小西円 (2018). 「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」『国立国語研究所論集』15, 91-105.
- 陳佐豪 (2024). 「双方向の談話における中国人日本語学習者のフィラーの使用—母語話者との比較を通して—」『第21回関西日本語研究会発表予稿集』.
- 山内博之 (2009). 『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房.
- 山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎 (2008). 『Rによるやさしい統計学』オーム社.